

イベントレポート 『2011 K耐久東海シリーズ 第5戦』

開催日 2011年12月11日(日)

9:30 決勝スタート 12:25 チェッカー

天候 晴れ

最高気温 10.3℃(12時)

場所 スパ西浦モーターパーク

参加台数 33台

33台のエントリーとなった第5戦。12月ということで肌寒い中でのレースとなったが、天候は快晴で絶好のコンディション。最終戦ということで各クラスともシリーズポイントの行方が注目される中、熱い戦いが繰り広げられた。

また今回初参加のNo.9のアルトは、最遠方エントリー記録を更新する新潟県からの参加となった。



■ KNNクラス(軽NAのノーマルクラス)

今回は新規格軽自動車のアルトバンとネイキッドが新たにエントリー。新規格車が少しずつ勢力を広げ、今回はクラス7台エントリーのうち6台が新規格車となった。

開幕より4連勝のNo.100「HACもらいものビート」は、今回も40Kgのハンディーウエイトを搭載する厳しい状況ではあるが、シリーズ史上初の5戦連続優勝を狙う。

しかし前戦ではNo.444「team YKSR ALTO」が僅差での2位に入るなど、アルト勢の進化も著しい。

果たしてビートの5連勝となるのか、それともアルトが初勝利を飾ることが出来るのか。



■ 予選

このクラス、予選1位となったのはNo.39「ステージワンレーシングアルトV」。タイムは1'10.933と好タイムを記録する。

2位には前회가初参加と経験の浅いNo.35「ZOURAレーシングアルト」が1'13.102で入ってくる。

3位は少数勢であるミニカで参加の、No.383「カワセミブルーミニカ」が1'13.221で続く。

前回、トップと僅差の2位でフィニッシュしたNo.444「team YKSR ALTO」は1'13.627で4位のポジションからのスタートとなる。

5位には初参加のNo.79「ヘッポコータネイキッド」が1'14.902で続き、5連勝を狙うNo.100「HACもらいものビート」は1'15.406で6番手からのスタートとなった。

また、もう一台の初参加No.9「SUZUKIアルトの井上」は、予選タイムが残せず最終グリッドからのスタートとなる。



■ 序盤

1 時間経過時点でのトップは、予選一番手からスタートした No.39「ステージワンレーシングアルトV」で 46Lap を周回する。

これを 1Lap 差で No.35「ZOURALレーシングアルト」と No.444「team YKSR ALTO」が続き、序盤はアルト勢が上位を独占することになる。

4 位には No.383「カワセミブルーミニカ」が 45Lap で続き、同一周回での 5 位に No.100「HACもらいものビート」が付ける展開に。

6 位の No.79「ヘッポコータネイキッド」は 41Lap と少し差が開き、ピットスタートとなってしまった No.9「SUZUKIアルトの井上」も 36Lap と序盤で出遅れてしまう。



■ 終盤

レースは途中で赤旗が一度も提示されず、各チームとも順調にラップ数を伸ばして行く。

2 時間が経過したところでも、No.39「ステージワンレーシングアルトV」がなおも 1 位をキープする。周回数は 93Lap を記録。

2 位のポジションも 1 時間時点から変わらず No.35「ZOURALレーシングアルト」がその座を守る。1 位とは 1Lap 差でラスト 1 時間に逆転の望みを託す。

91Lap での 3 位には No.100「HACもらいものビート」が浮上し、開幕 5 連勝に向けて最後の追い上げに入る。

また 4 位の No.444「team YKSR ALTO」も 3 位と同一ラップ。ワンチャンスで表彰台を狙えるポジションに付ける。

以下、5 位の No.383「カワセミブルーミニカ」は 87Lap、6 位の No.79「ヘッポコータネイキッド」は 83Lap、7 位の No.9「SUZUKIアルトの井上」は 72Lap で続く。



■ 最終結果

スタートから一度も 1 位の座を譲らなかった No.39「ステージワンレーシングアルトV」が、122 周でトップチェッカーを受け、嬉しい初優勝を飾った。No.100「HACもらいものビート」の開幕 5 連勝を阻止すると同時に、新規規格軽自動車での記念すべき初勝利をあげた。

2 位には終盤猛烈に追い上げた No.444「team YKSR ALTO」が、トップから 1 周差の 121Lap でチェッカーを受けた。

3 位の No.35「ZOURALレーシングアルト」は 2 位から遅れること僅か 8 秒。しかし参加から 2 戦目にして嬉しい初表彰台となった。

No.100「HACもらいものビート」は 120Lap を走りきったの 4 位でフィニッシュとなり、残念ながら史上初の開幕 5 連勝を果たすことは出来なかった。

5 位の No.383「カワセミブルーミニカ」は 4 位と同一の 120Lap を走りきったが、表彰台にはあと少し届かなかった。

No.79「ヘッポコータネイキッド」は 111Lap での 6 位、No.9「SUZUKIアルトの井上」はラスト 40 分のところでリタイヤとなってしまった。

シリーズポイントは、開幕 4 連勝を果たした No.100「HACもらいものビート」が 90 点で堂々の 1 位となり、2 位に 77 点の No.39「ステージワンレーシングアルトV」、3 位に 66 点の No.444「team YKSR ALTO」と続いた。

来シーズンは新規規格軽自動車がトップ争いを繰り広げるのか、それとも旧規格軽車がふんばりを見せるのであろうか。





■KNCクラス(軽NAのクローズドクラス)

今回のエントリーは4台ながら、No.81「パイオニア ワコーズ エッセ」が不出走となったため、実質3台での争いに。

最終戦を待たずしてシリーズ優勝を決めている No.25「アカミネコマル2トゥデイ」が有終の美を飾るのか、No.10「ぽんこつRTトゥデイ」または No.38「デモリッションエグゼトゥデイ」が一矢報いるのか。

■予選

予選1位となったのはNo.25「アカミネコマル2トゥデイ」で、タイムは1'08.839をマークする。

2位はNo.10「ぽんこつRTトゥデイ」でタイムは1'10.366。トップとのタイム差は1.5秒あるものの、グリッド位置は3つ後ろで追撃なるか。

3位はNo.38「デモリッションエグゼトゥデイ」で1'11.351をマーク。こちらも2位から二つ後ろのグリッドに付け、3台のグリッド差はほとんど無い状態。

■序盤

1時間経過時点ではNo.38「デモリッションエグゼトゥデイ」がトップに付け、49周をラップする。

2番手にはトップから1周遅れの48Lapで、No.25「アカミネコマル2トゥデイ」が付ける。

3位のNo.10「ぽんこつRTトゥデイ」も47Lapを走行し、残り2時間でどのような順位となるのかまだまだわからない。

■終盤

2時間が経過するとNo.25「アカミネコマル2トゥデイ」が96Lapでトップに出てくる。

2位のNo.10「ぽんこつRTトゥデイ」は95Lapに付け、ラスト1時間での逆転勝利に望みをつなぐ。

3位のNo.38「デモリッションエグゼトゥデイ」は94Lapで追いかける。最後の1時間で順位の入替わりはあるのか。

■最終結果

トップでチェッカーを受けたのは、127周を走りきったNo.25「アカミネコマル2トゥデイ」であった。今シーズン3勝目をあげ、シリーズ優勝に花を添えた。

2位はトップから1周遅れの126Lapでチェッカーを受けたNo.10「ぽんこつRTトゥデイ」が入った。終盤は監督不在の中、2戦連続で2位を獲得した。

3位にはNo.38「デモリッションエグゼトゥデイ」が124周で入った。

シリーズ順位は3勝をマークしたNo.25「アカミネコマル2トゥデイ」が断トツのリードで優勝を飾った。

シリーズ2位に入ったNo.10「ぽんこつRTトゥデイ」は開幕戦でのリタイヤが最後まで大きく響いた。

来シーズンはぜひ新規格車の奮闘を期待したいところである。





■KNO クラス(軽NAのオープンクラス)

このクラスは最終戦を待たずして、No.50「ベストライフトウデイ」がシリーズ優勝を決めている。しかしシリーズ 2 位争いは熾烈で、No.69「タカタCCMCTウデイ」が 48 点、No.23「チームミニトウデイ」が 44 点、No.99「チームオーシャンズトウデイ」が 43 点と、三つ巴ともいえる状態。最終戦を終えて最後に笑うのはどのチームか。

■予選

予選 1 位となったのは No.23「No.23「チームミニトウデイ」で、タイムは 1'05.113 をマーク。シリーズ 2 位を目指して幸先の良いスタートポジションをゲットする。

2 位には 1'05.420 で No.50「ベストライフトウデイ」が入る。シリーズ優勝を決めているものの、手綱を緩める気配はない。

3 位の No.296「小山輪業トウデイKR-O」は 2 位から遅れること 0.23 秒。4 位の No.99「チームオーシャンズトウデイ」は 3 位から遅れること 0.06 秒。また 5 位の No.90「ガレージトライトウデイ」は 4 位からわずか 0.07 秒遅れと、F1の予選を思わせるような僅差での戦いとなる。

以下、6 位に No.69「タカタCCMCTウデイ」、7 位に No.82「幸田組寄せ鍋ワコーズトウデイ」と続く。

■序盤

1 時間経過時点でのトップは No.23「No.23「チームミニトウデイ」。1 回目のピットインを遅らせたため、他チームより頭一つ出た形で 53Lap を周回する。

2 位以下のチームは 1 回目の義務ピットインを消化しているため、周回数は 50Lap となるが、何と 2 位から 5 位までの 4 チームがこのラップ数で並ぶ混戦状態。

2 位 No.50「ベストライフトウデイ」、3 位 No.99「チームオーシャンズトウデイ」、4 位 No.296「小山輪業トウデイKR-O」、5 位 No.90「ガレージトライトウデイ」と、予選の上位チームがそのまま名を連ねている状態。

6 位の No.69「タカタCCMCTウデイ」は 49Lap、7 位の No.82「幸田組寄せ鍋ワコーズトウデイ」も 48Lap に付けており、後半戦に望みをつなぐ。

■終盤

2 時間が経過したところでは 1 位から 3 位までのチームが 101 周で並ぶ。1 位に No.50「ベストライフトウデイ」、2 位に No.296「小山輪業トウデイKR-O」、3 位に No.99「チームオーシャンズトウデイ」のオーダー順となる。

4 位の No.23「チームミニトウデイ」と、5 位の No.90「ガレージトライトウデイ」は 100Lap で続き、ラスト 1 時間に勝負を懸ける。

6 位の No.69「タカタCCMCTウデイ」は 99Lap、7 位の No.82「幸田組寄せ鍋ワコーズトウデイ」は 97Lap と検討するが、上位陣が安定しているだけに表彰台は厳しくなってくる。



■最終結果

超激戦のKNOクラスを制したのは、終盤にジャンプアップを果たしたNo.296「小山輪業トウデイKR-O」であった。総合でも1位となる134Lapを周回し、嬉しい初優勝を飾った。

2位には133LapでNo.50「ベストライフトウデイ」が入り、シリーズ優勝チームの貫禄を見せた。

3位は2位から遅れることわずか3.4秒で、No.99「チームオーシャンズトウデイ」がチェッカーを受けた。

4位のNo.23「チームミニトウデイ」と、5位のNo.90「ガレージトライトウデイ」はラスト1時間で順位が変わることなく、同一の132周でのチェッカーとなった。

No.69「タカタCCMCトウデイ」は131周を走りきったものの、上位との差を詰められず6位でのフィニッシュとなった。

シリーズポイント争いは、第4戦で優勝を決めていたNo.50「ベストライフトウデイ」が85点までポイントを伸ばし、断トツでの1位となった。

3チームによるシリーズ2位争いは、最終戦の結果で明暗が分かれることとなった。今回3位でフィニッシュしたNo.99「チームオーシャンズトウデイ」が55点までポイントを伸ばし、何と2つポジションをアップしてのシリーズ準優勝となった。

またシリーズ3位争いは54点で2チームが並ぶ結果となった。しかし規定により大きなポイントを持っている方のチームが優位に立つため、今期優勝2回を記録しているNo.69「タカタCCMCトウデイ」が3位の座を獲得した。

同ポイントであったNo.23「チームミニトウデイ」は、惜しくも4位という結果になってしまった。

以下シリーズ5位にはNo.296「小山輪業トウデイKR-O」、6位にはNo.90「ガレージトライトウデイ」と続いた。

今期はレギュレーションが大きく変わったこともあり、昨年までとはシリーズ上位チームの顔ぶれががらりと変わった。果たして来年はどういったチームが上位争いを繰り広げるのであろうか。





■ KTCクラス(軽ターボのクローズドクラス)

シリーズポイント争いは、開幕戦で優勝した後に、一度も表彰台を逃していないNo.392「Zammersヴィヴィオ」が、62点で2位以下を大きく引き離している。

これを47ポイントのNo.112「白須賀会カプチーノ」と、41ポイントのNo.21「ZEST Lubrossセルボ」が追いかけるが、逆転優勝の可能性のあるのは2位に付けるNo.112まで。

このクラスのシリーズ表彰対象は4位までとなるが、No.46「カーエナジー ワークス アルト」とNo.95「白マックイーンカプチーノ」が共に32点で並んでおり、最終戦での結果がそのまま明暗を分けることになりそうである。



■ 予選

予選1位のタイムをマークしたのは、前回優勝と波に乗るNo.95「白マックイーンカプチーノ」。タイムは1'06.162を記録する。

2位には久々のエントリーとなるNo.15「ガレージイシヤマセルボモード」が1'07.420で続く。

3位のNo.46「カーエナジー ワークス アルト」は2位から遅れること僅か0.02秒の1'07.445。4位には1'08.125のNo.21「ZEST Lubrossセルボ」が続く。

今回6位以内のフィニッシュでシリーズ優勝をものにできるNo.392「Zammersヴィヴィオ」は、1'08.289で5番手に位置する。

6位には今年初参加となるNo.44「館山寺近藤自動車板金ヴィヴィオ」が1'09.066で入り、以下7位にNo.112「白須賀会カプチーノ」、8位にNo.88「アラッカヴィヴィオ」と続く。



■序盤

1 時間経過時点では、No.46「カーエナジー ワークス アルト」が 49Lap でトップに立つ。これに 2 位の No.88「アラッカヴィヴィオ」と 3 位の No.21「ZEST Lubrossセルボ」が 48Lap で続く。

6 位以内を狙う No.392「Zammersヴィヴィオ」は 47Lap で 4 位に浮上してくる。

5 位と 6 位は同一の 45Lap で、No.112「白須賀会カプチーノ」、No.44「館山寺近藤自動車板金ヴィヴィオ」というオーダー順。

予選上位の 2 チーム No.95「白マックインカプチーノ」と No.15「ガレージシヤマセルボモード」は、45Lap の 7 位と 44Lap の 8 位で、共に大きく順位を落とす。



■終盤

2 時間経過時点でも、No.46「カーエナジー ワークス アルト」が 1 位をキープする。98Lap を走行し 2 位に 3 週の差をつける。

2 位の No.21「ZEST Lubrossセルボ」と 3 位の No.392「Zammersヴィヴィオ」はともに 95Lap で表彰台圏内に付ける。

しかし 4 位の No.95「白マックインカプチーノ」と 5 位の No.44「館山寺近藤自動車板金ヴィヴィオ」はともに 94Lap に付けおり、ラスト 1 時間での逆転表彰台を狙う。

以下 6 位の No.112「白須賀会カプチーノ」は 93Lap、7 位の No.15「ガレージシヤマセルボモード」は 92Lap と、表彰圏内を懸けて最後の戦いを繰り広げる。



■最終結果

予選 3 番手からのスタートながら、序盤からトップをキープした No.46「カーエナジー ワークス アルト」が 129Lap を走り切り、第 2 戦に続く 2 勝目をあげた。

No.95「マックイン仕様カプチーノ」は、トップと僅か 0.3 秒差でのチェッカーで、鼻の差での 2 位となった。

3 位には 126 周を走りきった No.392「Zammersヴィヴィオ」が入り、嬉しいシリーズ優勝をものにした。

4 位でゴールした No.21「ZEST Lubrossセルボ」は、3 位と僅か 3.9 秒の差であった。

5 位には 124Lap の No.44「館山寺近藤自動車板金ヴィヴィオ」、6 位には No.112「白須賀会カプチーノ」と続いた。



最終戦の結果、シリーズ優勝は 74 ポイントの No.392「Zammersヴィヴィオ」に決まった。全戦において表彰台を確保するという安定した速さが、断トツでのシリーズ優勝につながった。

シリーズ 2~4 位は僅差での争い。2 位に入った No.112「白須賀会カプチーノ」が 53 点、3 位の No.46「カーエナジー ワークス アルト」は 52 点、4 位の No.21「ZEST Lubrossセルボ」は 51 点という結果であった。

このクラスも序盤はリタイヤが目立ち、ポイントを取りこぼしたチームは終盤までこれが響いた。どのクラスにも言えることであるが、シリーズを争う上では毎戦での完走が必須である。速さだけではなく、信頼性の高いマシンを作り上げることが、シリーズ成績を残す上では大きな鍵になるといえよう。





KTCクラス シリーズ表彰



■ KTOクラス(軽ターボのオープンクラス)

シリーズポイント争いは1位のNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」が60点、2位のNo.55「アビリティガレージワークス」が52点、3位のNo.666「ヴィスコンティIMWあると」が45点と、ここまでがシリーズ優勝の可能性を残す。

これに4位のNo.210「ZEST Lubrossアルト」が37点、5位のNo.32「爆走あばれ馬DXLミニカ」が32点で続き、シリーズ表彰圏内となる4位争いを繰り広げる。

No.14は今回3位以内であれば優勝を確定できるが、果たしてどういった展開になるのだろうか。



■ 予選

予選1番手のタイムを出したのはNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」。1'03.943をマークして、総合ポールポジションを獲得する。

2番手には1'04.565を記録したNo.210「ZEST Lubrossアルト」が入り、グリッド最前列をKTOクラスのマシンが占拠する。

3番手は今シーズン初参加となるNo.42「宮崎組DXLカプチーノ」が1'05.748で続く。

逆転でのシリーズ優勝を狙うNo.55「アビリティガレージワークス」は1'06.411でクラス4番手となるが、総合では10番目のグリッドとなり、トップを追撃するにはやや厳しいポジションからのスタートとなる。

以下5番手にNo.32「爆走あばれ馬DXLミニカ」、6番手にNo.666「ヴィスコンティIMWあると」というオーダーとなる。



■ 序盤

1時間経過後もなお、ポールスタートのNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」がトップの座を守る。52lapを周回し2位に2週の差を付ける。

2位もスタート時と順位が変わらず、No.210「ZEST Lubrossアルト」がポジションをキープ。50lapを記録する。

3位から5位までの3台は49lapで並ぶ。No.55「アビリティガレージワークス」は3位に浮上して、逆転優勝に望みをつなぎ、4位のNo.42「宮崎組DXLカプチーノ」、5位のNo.666「ヴィスコンティIMWあると」も10秒差でこれを追い掛ける。

6位のNo.32「爆走あばれ馬DXLミニカ」も48lapに付け、表彰台圏内をキープする。



■ 終盤

2時間が経過したところでもNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」が1位をキープ。102Lapを周回しシリーズ優勝が見えてくる。

これを1週の僅差でNo.210「ZEST Lubrossアルト」が追いかけて、逆転優勝に望みをつなぐ。

3位と4位はともに99Lapで、No.666「ヴィスコンティIMWあると」とNo.42「宮崎組DXLカプチーノ」が表彰台を懸けて戦いを繰り広げる。

5位のNo.55「アビリティガレージワークス」は96lapにとどまるが、この時点で3回の義務ピットインを既に終えているため、約5lapのアドバンテージがあり、実質は3番手付近のポジションか。



■最終結果

チェッカーまでラスト30分。トップを走行していたNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」が突如スローダウン。マシンを修復しコースに復帰するが、ストップ中のロスがどこまで影響してくるか…。

トップでチェッカーを受けたのは、132周を走りきったNo.55「アビリティガレージワークス」であった。表彰台常連のこのチーム、意外なことに今回が初優勝であった。

2位は今年初参加のNo.42「宮崎組DXLカプチーノ」が入り、周回数は130lapであった。3位のNo.210「ZEST Lubrossアルト」も130lapを周回したが、2位には22秒届かなかった。

4位には129lapでNo.32「爆走あばれ馬DXLミニカ」が続いたが、惜しくも2戦ぶりの表彰台とはならなかった。

ラスト30分でまさかのマシントラブルに見舞われたNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」は、125周にとどまり、5位でのフィニッシュとなった。

6位のNo.666「ヴィスコンティIMWあると」も5位と同じく125周でのチェッカーとなった。

シリーズポイント争いは、最終戦で初優勝を飾ったNo.55「アビリティガレージワークス」が72点まで伸ばす。一方今回5位に終わったNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」は68点止まり。

この結果、大逆転でNo.55「アビリティガレージワークス」がシリーズ優勝をものにすることとなった。

開幕3連勝を飾ったNo.14「ガレージイシヤマアルトバン」であったが、文字通り最後の最後でシリーズ優勝を逃してしまった。

シリーズ3位には51点のNo.666「ヴィスコンティIMWあると」、4位には49点のNo.210「ZEST Lubrossアルト」と続き、42点にとどまったNo.32「爆走あばれ馬DXLミニカ」は惜しくもシリーズ表彰対象の4位以内には入れなかった。

KTOクラスのシリーズ優勝争いは、まさに耐久レースの醍醐味と怖さを凝縮した結果となった。しかし勝って驕らず負けて挫けず、次なる目標に向かって各チームとも邁進していただきたい。



